

中国朝鮮族学校の教員の教育観に関する調査研究

——延辺朝鮮族自治州を中心に——

出羽孝行

(龍谷大学大学院)

はじめに

中国朝鮮族（以下、朝鮮族とする）は中華人民共和国（以下、中国とする）に居住する 55 の少数民族の 1 つである。その特徴として伝統的に教育熱が高く、民族言語も比較的高度に維持されてきたことがよく知られているが、それ以外にも彼らの居住地域が同一民族によって構成された国家（朝鮮民主主義人民共和国〈以下、北朝鮮とする〉）、及び大韓民国（以下、韓国とする）と国境を接している地域であることを指摘することができる。近年は特に韓国の在外同胞政策との関連の中で朝鮮族の社会的位置付けも変化を遂げる可能性があり、中国の少数民族政策のみならず、韓国や北朝鮮との関連の中で彼らの将来が左右される可能性も秘めている。その点において朝鮮族を研究対象とすることは、民族観・国家観との関連で少数民族教育を考察する意味においても意義あることと考える。

中国の朝鮮族人口は 2000 年の第五次人口調査によると 192 万 3842 人であるが、朝鮮族の集住地域である吉林省延辺朝鮮族自治州（以下、延辺とする）の朝鮮族人口は約 84 万 2000 名で、自治州全体で占める割合は 4 割弱である。朝鮮族の居住地の中心であった農村部は 90 年代後半から急速な都市化の波にのまれ始め、当該地の朝鮮族小中学校の廃校が進み、先行研究でも民族教育の「危機」が深刻な問題として指摘されている⁽¹⁾。

本論文では、学校教育の担い手である教員の教育観を考察することによって、①教員の社会的地位の現状とそれを定義付けている要因、②教員の教育活動の中での民族教育の位置付け、③教員が考える民族教育の現状とそれを定義付けている要因について明らかにする。そこから、教員が抱える問題をはじめ、教員が認識している民族学校の

問題を知ることができると考えた。分析にあたっては先行研究から得られた知見に加えて、2001 年 3 月に延辺に存在する朝鮮族中学の教員を対象に実施した質問紙調査（2001 年調査）の結果を用いると共に、統計データで不足する部分については、2000 年 9 月に同地の朝鮮族中学教員 43 名に実施した調査（2000 年調査）の記述回答を使用することとした。

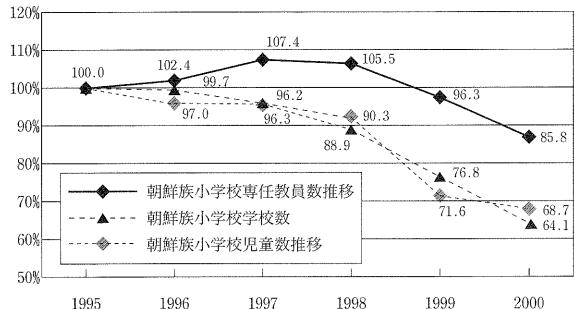
本論文の構成としては、朝鮮族学校やそこでの教員に関わる問題点について考察した後、朝鮮族教員の教育観を分析する。なお、本論文では、教員の専門性について「社会的に教育の専門家としての認識がなされ、教員自身も教職に対して教育の専門家としての意識を持つこと」とし、延辺に存在する朝鮮族学校を中心に論じていく⁽²⁾。

1. 朝鮮族学校教員を取り巻く問題点

（1）朝鮮族学校教員に関する先行研究

中国では、1993 年に「中華人民共和国教師法」、1995 年に「中華人民共和国教育法」が公布され、法律面では教員の地位や待遇などについての整備がなされたが、実際に法が遵守されていない部分もあり、法整備だけでは問題解決には至っていない現状が存在する⁽³⁾。今まで朝鮮族学校教員の問題については、主に現地の研究者により論じられてきた。ソヒヨソンは教員の資質向上の過程について言及し⁽⁴⁾、姜永徳は元来漢族教員よりも「質」の高かった延辺の朝鮮族教師が漢族教師の水準にまで下がってきたことを取り上げ、朝鮮族の師範教育の弱化に問題の源泉を認めている⁽⁵⁾。社会調査を用いた研究としては、韓国において、韓玉淑が韓国と延辺の幼稚園教諭の教育観の比較研究を行っているが⁽⁶⁾、北朝鮮の教員の教育観を

図1-1 延辺の朝鮮族単独小学校の教員数・学校数・学生数の変遷



出典：延辺朝鮮族自治州教育委員会『教育統計資料』1995-1996年学年初～2000-2001年学年初の各年度の統計数字を用いて作成。

知るための手段として延辺の朝鮮族教員の教育観を考察するという点に限界が認められる。

これら教員に関する論文や、朝鮮族教育全般について考察した先行研究などで指摘されている朝鮮族学校教員集団の問題の論点を整理すると、①都市と農村の教員数のバランスが崩れている問題、②教員待遇が低い問題、③教授の質が低い問題、④敬業精神が低い問題、⑤退職教員の増加問題などを挙げることができる⁽⁷⁾。しかし教員の「資質」や地位の低さと、実際の教育問題の発生との因果関係を明らかにすることは困難であると思われる。それは学習者に与える教育者の意図的・無意図的働きかけが個人の発達のどの部分に影響を与え、それがどのように機能しているかを明確に定義しにくいからであるが、それでも教員自身の教育観を明らかにすることで、待遇をはじめとした教員の社会的地位、民族教育の現況、そして民族学校を維持・発展させていく上で必要な教員の「資質」とは何かを探ることは可能であると考えた。以下、朝鮮族学校教員の問題について論じる前に、まずは中国全体における朝鮮族教員の特徴について統計資料から考察していく。

(2) 学校数・生徒数・教員数の変動状況からみた朝鮮族教員の特徴

急激な人口移動に伴い農村の朝鮮族学校の生徒減少は深刻であるが、朝鮮族学校全体としても97年頃を境に生徒の減少傾向は止まるところを知らない⁽⁸⁾。小学校の児童数をみた場合、全国的にも97年を境に減少に転じているが、減少幅は朝鮮族学校のほうが大きい。

全国の小学校と延辺の朝鮮族小学校を比較してみると⁽⁹⁾、1995年の小学校児童数を100としたとき、2000年の割合は全国平均で98.6、朝鮮族学校では64.1と極端に減少している。学校数の増減については、同じく全国平均で82.8、朝鮮族学校で68.7であり、教員数に至っては全国平均で103.5と1995年よりも増加しているのに対し、延辺朝鮮族学校では85.8である。このことから、延辺朝鮮族学校がたたされている状況は全国平均よりも遙かに深刻であり、教員問題も朝鮮族学校特有の問題が存在しているといえる。次に、95年の値を100とした時の朝鮮族小学校の児童数・学校数・教員数の増減割合を年度毎に示した図1-1から朝鮮族学校のみの状況を見た時、生徒数と学生数の減少率はほぼ同率で減少しているのに比べ、教員数（専任）は2000年で85.8と減少率は低く、しかも減少動向は学校数や生徒数の割合よりも数年遅れた傾向を見せており、これから益々教員数が減少していくことがわかる⁽¹⁰⁾。つまり、朝鮮族教育は先行きが明るくなく、今後「余った」教員が増加することも予想され、これが教員の将来に不安を与え、退職教員の増加を促す一要因になっているとも考えられる。教員の給与待遇や社会的地位の問題などは確かに中国全体でもあるといえるが、上の考察によって朝鮮族学校が立たされている現況が朝鮮族学校教員の立場をより不安定で深刻なものとしていることが理解できよう。

(3) 朝鮮族学校の社会的地位の低下と朝鮮族生徒の民族性

朝鮮族単独小学校では、都市でも児童数が急速に減少しているが、それは出生率の減少のみならず、漢族学校へ進学する朝鮮族の子どもの増加によるものもある。2000年現在で全州朝鮮族小学生全体の11.2%、中学の場合、9.55%が漢族学校に通っている現状が存在しているのである⁽¹¹⁾。それでも言語使用実態についての各種調査⁽¹²⁾から、都市と農村部とでは差異があるものの、現在のところ延辺の朝鮮族は漢語よりも圧倒的に朝鮮語を用いて生活している。また、朝鮮族同士の親密性も高く、自民族に対して肯定的な態

度をもち、高度に民族性を維持している⁽¹³⁾。しかし、漢族学校へ通う生徒の増加や朝鮮族学校の「縮小」はこれにも変化を与える可能性がある。

(4) 紿与待遇

「中華人民共和国教師法」では第25条において「教師の平均給与の水準は、国家公務員の平均給与の水準と高低があってはならず、さらに正常な普通の昇給制度を制定しなければならない。具体的な方法は、国務院の規定による。」⁽¹⁴⁾として、法的には教員給与は保証されている。また、第38条では地方人民政府による給与不払いや教育経費の流用を行ったものに対しては行政処分を行い、嚴重な場合には刑事責任を問えるとしている。しかし実際は、①給与自体が少なく特に都市と農村での差が大きいということのみならず、②給与自体が遅延して未払い現象が生じている問題があるという⁽¹⁵⁾。一部の地方政府では、学校を単位にして数千元ずつ賃金をカットしたり、執務経費のみならず、教員の賃金まで不足分を学校自体で解決させたりしている例もあるという⁽¹⁶⁾。中国の教育は「まだ法によって教育をなす次元に至ることができておらず」、朝鮮族の「民族教育も法的な保護を受けられていない」⁽¹⁷⁾現状が存在するようである。給与差は、延辺内でもあり、竜井など6県・市の教員の平均給与は自治州の中心地である延吉や、敦化よりも200元前後低い⁽¹⁸⁾。

ただ、筆者が中学教員から聞いたところによれば、現在初任給は700元とのことである⁽¹⁹⁾。また別の教員の話によれば、2002年1月より20%程度の賃金上昇が図られ、夏より更に上昇予定とのことなので⁽²⁰⁾、今後の動向に注目していく必要があろう。

(5) 教員の「下海」現況

下海現象は「公務員や教員などが公職を捨てて市場経済の流れに身を任せたり、外国合資企業に就職したりするなどの利潤追求活動をすることをいう」⁽²¹⁾が、単に国内で移動するのみならず、韓国などの外国への出国は朝鮮族教員の特徴である。近年こののような教員が増加しており、また農村部の教員が都市に流入してくる現象も目立っているこ

表2-1 2002年調査の対象者属性表

学校名	人数(人)	%	地域属性
A中学	56	19.6	都市
B中学	29	10.2	都市
C中学	47	16.5	都市
E中学	83	29.1	都市
F中学	18	6.3	都市
G中学	10	3.5	都市
H中学	22	7.7	地方
I中学	9	3.2	地方
J中学	11	3.9	地方
合計	285	100.0	

とから都市と農村の教員分布に偏りが見られる⁽²²⁾。

教員の退職現象は深刻で、「1991-2000年」間に全州の朝鮮族教師の流出は4200名で朝鮮族教師総数の53.1%を占め、10

年間にも全州朝鮮族教師の半数以上が流失し、現在の教師の半数以上は教師歴が10年に満たず、「たった1998-2000の間にわが州朝鮮族小中学校とも1145名の教員が流失し、それは朝鮮族専任教員総数の14.5%にのぼる」⁽²³⁾との報告もある。学校毎に見ても、多い学校では3年間で3割から4割の教員が転職していったという⁽²⁴⁾。また、呉クムスクは朝鮮族教育が危機に直面した根本原因の一つに、教員集団建設が弱化することによって朝鮮族学校での教授の質が低下していることを述べているが、この中で2000年度に他の職種に移った朝鮮族小中学校の教員が479名であり、2000年度の専任教員数の5.8%にものぼると報告している⁽²⁵⁾。しかも退職教員の多くは今後の教育を担う「骨幹教師」であるという。

また、実際に延辺朝鮮族自治州教育委員会調査研組が朝鮮族学校の教員に対して、質問紙調査で「あなたは一生涯学校での工作をしたいと思いますか?」とたずねたところ、「条件があれば離職したい」と「現在離職したいと思っている」との回答を合わせて52%が退職の意思をもっているという⁽²⁶⁾。

2. 朝鮮族学校教員の教職観

(1) 朝鮮族学校教員の教育観調査の概要

2001年調査の概要は、以下のとおりである。

【名称】朝鮮族学校の先生の教育観に関する調査
【調査対象】延辺の初級中学⁽²⁷⁾・高級中学の9校、285名の教員⁽²⁸⁾（表2-1参照）

表2-2 教員の教職観についての平均値一覧(上段:平均値、下段:標準偏差)<全体平均値順>

*p<0.05 **p<0.01

	全体平均	年齢別				地域属性別			
		20代	30代	40代以上	F値	都市	農村	T値	
教員の規範意識について	道徳品性	1.39 (0.63)	1.15 (0.62)	1.49 (0.60)	1.47 (0.63)	6.94 **	1.45 (0.61)	>1.13 (0.68)	3.22 **
	生徒に対する愛情	1.37 (0.64)	1.26 (0.67)	1.39 (0.66)	1.37 (0.56)	0.65	1.40 (0.67)	>1.22 (0.51)	2.04 *
	使命感	1.35 (0.72)	1.12 (0.74)	1.46 (0.70)	1.38 (0.68)	4.65 *	1.42 (0.70)	>1.06 (0.73)	3.13 **
	積極性	1.21 (0.73)	1.20 (0.75)	1.20 (0.75)	1.15 (0.69)	0.01	1.28 (0.69)	>0.88 (0.82)	3.53 **
	教職の専門性	1.20 (0.70)	1.11 (0.74)	1.25 (0.67)	1.21 (0.69)	1.24	1.29 (0.69)	>0.80 (0.61)	4.62 **
	教員自身の民族的自覚	1.18 (0.74)	1.21 (0.76)	1.15 (0.76)	1.24 (0.67)	0.23	1.23 (0.72)	0.98 (0.79)	2.13 *
	生徒からの評価	0.98 (0.73)	0.93 (0.74)	1.00 (0.68)	1.00 (0.77)	0.46	1.06 (0.72)	>0.63 (0.64)	3.82 **
	保護者からの評価	0.95 (0.72)	0.88 (0.73)	0.99 (0.69)	0.98 (0.76)	0.58	1.02 (0.72)	>0.65 (0.63)	3.30 **
係社会につとめて教員との関	職業の安定性	0.29 (0.88)	0.38 (0.92)	0.20 (0.91)	0.29 (0.83)	0.85	0.40 (0.86)	>-0.16 (0.79)	4.40 **
	社会的地位	0.16 (0.88)	0.17 (0.94)	0.12 (0.88)	0.13 (0.83)	0.37	0.28 (0.83)	>-0.35 (0.93)	4.63 **
	他の職業との相対的評価	-0.02 (0.97)	0.27 (0.95)	-0.20 (0.98)	-0.11 (0.95)	5.34 **	0.10 (0.95)	>-0.52 (0.89)	4.19 **
	経済的地位(給与待遇)	-0.34 (0.90)	-0.31 (0.87)	-0.46 (0.91)	-0.30 (0.77)	1.06	-0.24 (0.91)	>-0.78 (0.69)	4.58 **
	教師の民族性維持度	0.43 (0.77)	0.51 (0.75)	0.37 (0.81)	0.37 (0.75)	1.64	0.42 (0.78)	0.47 (0.75)	-0.398

(階級値) 2:非常に高い、1:多少高い、0:普通だ、-1:多少低い、-2:非常に低い

【調査時期】2001年3月23日～4月5日

対象者の属性は、都市部233名、地方52名であり、年齢別では20歳代が75名、30歳代が131名、40歳代が59名である⁽²⁹⁾（その他、生年記載がないものが20件）。性別では男性が90名、女性が166名（その他、記載がないものが29件）であるが、今回は性差の詳細な分析は行わない。性差が生じる原因は性が社会的に背負っている社会的背景によるものと考えられ、重要であることは認められるものの、それを明確に定義するのは本論文の範囲を超えると思われるからである。なお、調査言語は、朝鮮語でを行い、調査方法としては、調査対象校の担当教員に依託し後日調査者が回収しに行った。また、全体の質問項目を作成する上で門脇・藤田による日本・韓国・中国の教育意識の比較研究での調査項目⁽³⁰⁾や、久富らによる教員に対する調査の項目⁽³¹⁾、先述の韓玉淑による延辺と韓国における幼稚園教員の比較調査の項目⁽³²⁾を参照した。

また、2000年調査については、2000年9月に延辺に存在する朝鮮族初級・高級中学（民族連合学校を含む）の朝鮮族教員43名に対して実施し

た。設問に関しては、一部選択項目を設定した以外は原則として自由記述とした。回答文に記載した年齢層や勤務校は調査当時のものである。

(2) 意識面

表2-2は、教員の規範意識、及び社会と教員との関係についての意識についてたずねた結果を平均値で表したものである。階級値の設定は、表の下部に記載したとおりである。中間値を0とし、+値になるほど高い結果となり、-値になるほど低い結果となる。

「使命感」や「道徳品性」といった意識の部分や、生徒への愛情については1.3以上の数値が見られ、回答自体も約9割が肯定的回答をしているが、社会的地位は0.16となり、経済的地位、そして他の職業との相対的評価においてはマイナス値となる。教員の社会的地位や経済的地位の低さが裏付けられる結果が表出しているわけであるが、これが退職教員の増加に拍車をかけていると思われる。

20代、30代、40代の3群間で比較したところ、いくつかの項目で3群間に有意な差が見られ、20代よりも30代以上のはうが教員としての使命感

表2-3 教員待遇についての考え方(上段:平均値、下段:標準偏差)

*p<0.05 **p<0.01

平均値整理	全体平均	年齢別				地域属性別		
		20代	30代	40代以上	f 値	都市	地方	t 値
給与待遇改善が「優秀な」教員確保となると思うか	1.27 (0.83)	1.05 (0.90)	1.35 (0.80)	1.52 (0.64)	5.76 **	1.22 (0.87)	1.48 (0.58)	-1.947
教職を継続しようと思うか	0.82 (0.98)	0.78 (0.91)	0.67 (0.97)	1.22 (0.84)	6.85 **	0.87 (0.97)	0.61 (0.98)	-2.02 *

(階級値) +2:全くそう思う、+1:多少そう思う、0:どちらともいえない、-1:あまりそう思わない、-2:全くそう思わない

や道徳品性意識が高く、他の職業との相対的評価については低いとしていることがわかる。地域別では、「教師の民族性維持度」を除くすべての項目で地方が都市よりも低い評価が出ていることから、地方の学校では、退職（流失）教員の増加などという可視的現象のみならず、教員の意識の低下という潜在的問題もより深刻であると考えられる。都市と地方との格差は延辺朝鮮族学校の場合に限らないとはいえ、これまで朝鮮族が民族語を維持することができたのは民族政策というよりも朝鮮族が集中的に居住する閉鎖的農村社会にあったこと⁽³³⁾を考えれば、単に漢族の状況と同様の現象とみなすわけにはいかないだろう。

教員自身の民族性維持度については、全体で0.43であり、民族的自覚ほどには高くなく、民族性を高度に維持することが教員としての道徳品性や使命感といった職業意識を持つことには直接関係していないと考えられる。

(3) 教職の満足な点

教職の満足な点についてそれぞれ選択肢から3つまで選択してもらったところ、「教職は聖職である点」(61.6%)、「職業的に安定している点」(51.2%)、「朝鮮民族の発展に貢献できる点」(47.7%)との回答が多くみられた一方、「やりがいがある点」は21.7%、「社会的地位が高い点」は12.0%、「給与待遇がよい点」に至っては約3%にとどまっている。そこで給与待遇の改善が優秀な教員確保に役立つかとたずねたところ、役立つとしたのは(「全くそう思う」と「多少そう思う」を合わせた回答)、91.4%にもものぼった。回答を平均値にして属性別にみたところ(表2-2参照)、20代、30代、40代の3群間に有意な差が見られ、年齢が高い教員ほど強くそのように思っていることが判明した。特に30代以上の年

齢層でその思いが強いのは、これまで多くの優秀な教員が退職していった現実を見てきたからだと考えることが可能であろう。前述したように教員の待遇改善は、現在進められているので、本当に給与待遇が優秀な教員の確保となるかについてはこれから答えが出てくるものと思われる。

(4) 教職継続の意思について

自分自身が教職を今後も継続していくつもりかという質問に対しては表2-3のように、継続するつもりとの意見が比較的強いことがわかる。年齢別では20代、30代の教員は40代以上に比べて継続の考えが弱い傾向がみられるが、これは若い者のほうが社会的条件において転職しやすい状況にあるからだろう。ただ、継続の意思が低いという、前章でみたような調査結果もあることから、「潜在的な」転職希望者は実際には今回の調査以上に多いと考えることは可能であろう。2000年調査で教職を定年退職まで継続しようと思わないとする教員(あまりそのように思わない、全くそのように思わないとしたもの)に対してその理由をたずねたところ、①自己の能力を発揮できる機会を得る、②教職に魅力がない、③将来への不安がある、④年を取ったらやめたほうがいい、などの理由を挙げていた。

①については、以下のような理由が見られた。

「教師をしながら教師の接触範囲が小さすぎる」という感じがした。発展する時代の足どりに追いつこうとすれば外に出てたくさん学ばなければならず、若いときに自分をよく充実させねばならないと思う。」(20代前半、女性、D中学)

また、③についても、以下のような回答が見られた。

「<前略> 今朝鮮族の中で自分の生徒を漢族学校や都市の学校に進学させる現象がわりと多い

図 3-1 民族教育の概念に最もあてはまるもの

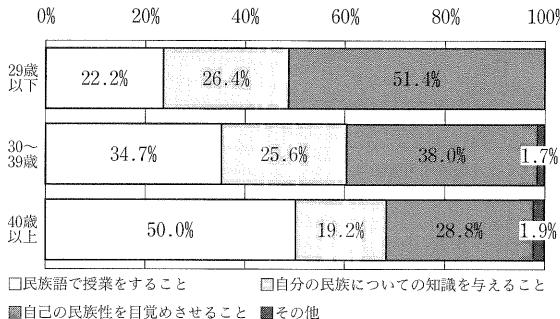
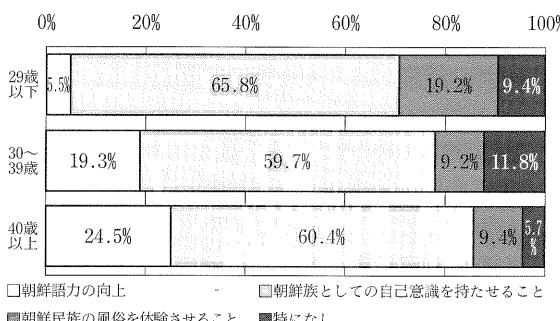


図 3-2 学校での民族教育で最も重視すること



ことがあり、朝鮮族小中学校——特に郷鎮学校の生存がわりと難しいからである。」(20代後半、男性、D中学)

自己の能力を活かすために転職しようとする「積極的な」理由が存在するとともに、朝鮮族学校が現在直面している問題点を率直に指摘している声が存在しており、朝鮮族学校の先行き不安は教職を継続する上で大きな障害要因となっていることが理解できる。

3. 朝鮮族学校教員の民族教育観

ここでは、民族教育の概念、民族学校を取り巻く問題、そして民族教育を行う際に難点となることや民族教育に対する認識などの、民族学校教員としての教育観を明らかにすることにより、朝鮮族教育の内実や民族学校を取り巻く問題点に対する教員の認識の解明を試みたい。朝鮮族学校の教員達が児童・生徒の民族性⁽³⁴⁾の問題についてどのように考えているかを知ることは、朝鮮族学校の今後を考える上で極めて重要であり、たとえ専門性を備えた教員であるとしても、少数民族学校

で勤務する教員としての教育認識が欠如していれば少数民族学校以外の教員と変わることがなく、「危機」に直面している朝鮮族教育の発展に寄与することができないであろう。

(1) 民族教育の概念

朝鮮族生徒の民族性について、筆者が1997年に延辯と長春の朝鮮族中学の生徒を対象に実施した調査によると、朝鮮語のできる度合いと民族文化の維持度とは直接関係ないことがわかり、民族言語能力が民族性の維持すべてに影響を与えていけるとはいえないことが明らかになっている⁽³⁵⁾。つまり、朝鮮語力だけでは民族性の維持度を判断できないのである。では、教員達が考えている民族教育の概念とはどのようなことだろうか。これについて単数回答でたずねたものを図3-1のように年齢別でみたところによれば、20歳代は「自己の民族性を目覚めさせること」を半数以上が選択しているのに対し、40歳以上は約29%の回答にとどまり、逆に半数が「民族語で授業をすること」と回答している。民族語で授業をすることが民族教育であるとする立場があるなかで、若い教員ほど言語以外の面を重視していることが窺える。

次に、民族教育で実際に重視している点を探ることで、より実践的に民族教育についての教員の考えに迫ってみるために、生徒に対する、学校教育での民族教育で最も重視する事柄について質問した。その結果、「朝鮮語力の向上」と回答したのは、年齢別に表した図3-2をみると、20歳代で5.5%にとどまっている反面、40歳以上は約24.5%にのぼっている。このことから、年齢層が高い教員のほうが民族教育において民族言語を重視するのに対し、若い教員は必ずしも言語重視とはなっていないことが理解でき、民族言語の重視度は今後低下していくものと思われる。全体的にはどの年齢層も6割前後が、生徒に「朝鮮族としての自己意識を持たせること」と答えており、学校での民族教育の概念について広く解釈していることがわかる。

(2) 民族教育の困難性

現在の朝鮮族社会における朝鮮族としての特性(言語、風習、生活習慣、価値観)の状況につい

てたずねた結果において、「非常に弱まっている」と「多少弱まっている」との回答が約9割

を占めており、朝鮮族としての特性は弱化しているとの考えが教員の中で一般化していることが理解できる。表3-1は同様の設問の結果を年齢階層別・地域別に平均値で表したものであるが、これをみると、20代、30代、40代の3群間に有意な差が見られ、年齢が高くなるほどマイナスの値となっており——つまり、民族の特性が弱まっているという度合いが高くなっている——特に40歳代以上でその傾向は顕著である。地域別では、都市、地方とも値にはほとんど差がなく、朝鮮族としての民族の特性の弱化は地域に関わりなく進行しているという現状を知ることができる。また、高年齢層ほど民族の特性が弱まっているとの認識を抱いているということは、近年の社会状況の変化を如実に示している。

これと関連して民族教育を行う際の最大の難点についてたずねた2000年調査の回答についてみてみると、①民族言語媒体の不足、②民族意識の不足、③社会的に民族意識や民族言語が「軽視」されていること、④行政の理解不足の4点に整理できる。それぞれの区分毎に回答文を以下に示す。

①「我が民族語で書かれた生徒用課外図書がかなり不足しており、民族教育での教授、教学参考書が不足している。情報化時代に突き進んでいる現在であるが、様々な教育情報を受け入れようと思えば、まだ新聞、刊行物、放送に依拠しなければならないなどである。」(20代後半、男性、D中学)

②「家庭、学校、社会などの民族教育の意識についての欠如、そして生徒自体の高められない民族性のために、朝鮮民族としての誇り、伝統意識、民族意識がだいになくなっていくことだと思う。」(30代後半、男性、B中学)

③「56個の民族が暮らしている中国において自分の民族教育、特に自分の言語、文字は重要であるが実利上、言語や文字の使用の必要性が

表3-1 社会における民族の特性の状況(上段：平均値、下段：標準偏差)

*p<0.05

平均値整理	全体平均	年齢別				地域属性別		
		20代	30代	40代以上	f 値	都市部	地方	t 値
社会における民族の特性の状況	-1.13 (0.78)	-0.94 (0.74)	-1.11 (0.84)	-1.30 (0.66)	3.16*	1.13 (0.80)	1.14 (0.67)	0.10

(階級値) +2：非常に強まっている、+1：多少強まっている、0：どちらともいえない、-1：多少弱まっている、-2：非常に弱まっている

少なくなっていること。」(40代後半、男性、A中学)

「社会上で民族教育についての重視が実際に、大きく高められることがなく、また民族同化現象が厳しい。」(20代後半、男性、C中学)

④「上級機関において民族教育に対する具体的な関心が不足しており（経済面）、地方の教育部門において実際的な指導、および様々な民族教育を活性化させているのだけれど、必要とする資料など、不足しているのです。」(30代前半、男性、C中学)

中国では少数民族語である朝鮮語媒体の消費者が限られているために朝鮮語出版物が不足し、さらに漢語が重視されている社会状況の中で相対的に朝鮮語や朝鮮文化に対する社会的地位が低下することにより、子どもたちが民族の言語や文化に愛着をもてなくなっているという現実が存在しているというのである。朝鮮族学校の教科書出版を担っている延辺教育出版社は予算不足という問題を抱えており、それでなくとも朝鮮族の子どもの減少で朝鮮語テキストの出版事情は苦しく、赤字分を国（東北三省）からの援助金で賄っている現状があり、行政的な援助なしでは問題の解決は難しい⁽³⁶⁾。他の点についても個々の教員の取り組みだけで解決することはほとんど不可能であろう。確かにこのような社会状況の下で子どもたちに民族の言語や文化を大切せよと訴えたところで、どの程度説得力を持つかは疑わしいと言わざるを得ない。少なくとも民族教育に関わる部分については、朝鮮族の教員自身が信念を貫いて教育実践を行いにくい状況が存在しているようである。朝鮮族学校の先行き不安は教員の「下海」を促す要因になるであろう。

朝鮮族教員は民族教育で最も重視することとして、言語よりもむしろ自分が朝鮮族であるという自己意識を生徒に持たせることを重視しているが、

表3-2 朝鮮族学校のこれから(上段:平均値、下段:標準偏差)〈全体平均値順〉

**p<0.01

平均値整理	全体平均	年齢別				地域属性別		
		20代	30代	40代以上	f 値	都市部	地方	t 値
授業改革	1.37 (0.83)	1.20 (0.97)	1.42 (0.80)	1.49 (0.76)	2.20	1.32 (0.89)	1.57 (0.50)	-2.65**
教授言語を変更	0.30 (0.83)	0.20 (1.32)	0.38 (1.26)	0.24 (1.42)	0.44	0.31 (1.34)	0.25 (1.25)	0.27
寄宿制度の導入	0.16 (1.19)	0.24 (1.12)	0.18 (1.16)	0.04 (1.28)	0.44	0.02 (1.20)	0.76 (0.95)	-4.76**
漢族教員の増員	0.14 (1.29)	0.11 (1.17)	0.31 (1.28)	-0.17 (1.44)	2.52	0.22 (1.31)	-0.18 (1.20)	1.96

(階級値) + 2 : 是非行う必要がある、+ 1 : 少多少行う必要がある、0 : どちらともいえない、- 1 : あまり行う必要はない、- 2 : 全く行う必要はない

社会環境要因により朝鮮族の民族性は弱まっていると認識しているという状況が明らかとなった。言語のように具体的なものとは違って、自分が朝鮮族という自己意識は個人によりさまざまに意識できるという点で非常に曖昧なものであり、民族教育の先行きが懸念される。

(3) 民族学校をとりまく問題について

子どもたちの民族性の維持は、祖父母との関わりや儀式の実施などをはじめとした、家庭や地域共同体における無意図的教育機能に依っている部分も存在するであろう。しかし、学校制度は今のところ、社会的に正当化されている、教育システムを担う唯一の制度であり、そこで伝達される言語、様式、価値観が子どもや社会に与える影響は極めて大きいと言える。そのような、生徒の民族性維持の中心的役割を果たしている民族学校を取り巻く問題について教員達がどのように認識しているかを考察することとする。

漢族学校への転校希望者への対処についてたずねたところ、全体の4分の3にあたる73.9%の教員が「生徒や保護者の意見を尊重する」と答えている。前述したように漢族学校へ行く朝鮮族生徒の増加は、延辺においても大きな教育問題となっており、朝鮮族学校の教員にとっても自身のこれから的生活に関わる問題であるが、この結果からは朝鮮族学校存続のために積極的な努力を行わないであろうことを示すに至っている⁽³⁷⁾。

表3-2は、これからの民族学校のあり方についての考え方をたずねた結果を平均値で示したものである。階級値は表下部分に記載の通りである。朝鮮族学校が「授業改革」「教授言語を変更」「寄宿制度の導入」「漢族教員の増員」を今後行って

いく必要があるかについてであるが、全体としては行う必要があると考えている傾向がみられる。特に授業改革を行う必要性を多くの教員が

感じている。授業改革をはじめ、教授言語の部分的変更などは、今日、朝鮮族学校の生徒が漢族学校へ流失するという都市部に存在する朝鮮族学校の直面している「危機」を防ぐ手立てであり、姜永徳が主張している朝鮮族学校における「二重言語兼学単用制」から「二重言語兼学併用制」への転換の議論とも関わる⁽³⁸⁾。実際、延吉市第8中学では2001年の新入生で「2つの言語」教授実験クラスを2クラス設けて、5教科を漢語で教授すると共に担任と生徒との会話を漢語で行うなどしており、一定の成果が認められているという⁽³⁹⁾。寄宿制学校の導入は、生徒数減少で朝鮮族学校を維持できなくなった、主に農村地域の子どもたちを一元的に集めて民族教育を行えるという点で朝鮮族教育を維持するために有効な手段である。都市と地方とでは、「授業改革」と「寄宿制度の導入」について有意差が見られ、都市に比べて地方の学校教員のほうがこれからの必要性を感じているという結果となった。

さらに、漢族学校への転校希望者に対して「続けて朝鮮族学校に通うよう説得する」と回答した教員と「生徒や保護者の意見を尊重する」と答えた教員との間に、民族学校のこれからのあり方についての意識の違いが存在するかについて考察した結果、「寄宿制民族学校の導入」については続けて朝鮮族学校に通うよう説得すると回答した教員のほうが必要性を感じているということが判明した。

以上、朝鮮族学校教員の民族教育観について考察してきたが、教員達は民族教育を実践するうえで周囲の環境の「厳しさ」について認識しているものの、朝鮮族の子どもは朝鮮族学校で教育すべきという意思は弱いことが明らかになった。また、

民族教育の概念も特に若い世代で「拡散」している傾向がある。農村を中心に維持されてきた朝鮮族農村共同体が「崩れ」つつある現在において、言語をはじめとした朝鮮族の民族性を維持することに貢献できるのは、民族学校に依るところが大きいと考えられる。その意味で、教員による民族教育概念の「拡散」は、朝鮮族教学校における朝鮮族の民族性の維持にとってマイナスに作用する可能性があることを示していると言えよう。

おわりに

本論文では、延辯に存在する朝鮮族学校教員の教育観を分析して朝鮮族学校教員問題を論じてきた。教員状況については、中国全体に共通の問題と重なる部分も少なくないが、少数民族としての朝鮮族の教育により深刻で特有な問題も存在することが明らかになった。その意味で、朝鮮族学校教員の問題を朝鮮族教育という枠組みの中で考察した意義は大きいといわねばならない。そこで、最後に本論文で明らかになったことを以下に示しておきたい。

まず1つ目に、社会的地位の低さの要因としては、給与保証がなされていないことが判明した。教員待遇の改善は2002年ごろよりなされてきているものの、少数民族言語や民族性の維持に対する社会的価値観が低下している中で、自己の可能性に挑戦しようとする若い教員の意識を変えさせる程までに至るかは未知数である。また、実際の待遇や職業意識については都市と地方、若年層と熟年層との隔たりは大きく、「教育の自由化」が進む中で地域差を改善することは困難な作業であろう。この状況下で、「教育愛とか人間愛とかいう言葉でよくしめされるよう」な「特殊な職業倫理」⁽⁴⁰⁾だけで社会的地位を保つことは限界がある。

2点目としては、民族教育の概念が明確にされていない現状において、民族教育として重視されている観点が拡散してきていることが挙げられる。教員達は民族教育の必要性を感じていながらも、具体的にどのように実践していくべきかという明確な指針が存在していないように思われる。

そして3つ目に、民族教育を実践するための社

会的環境は弱まってきており、教員自身にとっても民族教育を決して第一義的なものと認識していない現実が認められる。社会環境が朝鮮族教育の実践にプラスに作用しておらず、社会的にあまり民族言語の必要性が感じられなくなってきたる上に、朝鮮族教員にとって朝鮮族生徒は朝鮮族学校に通うのがあたり前のことと認識されてきていよいである。2つ目の論点とも関係するが、民族教育の定義がはっきりしていない中で、朝鮮族の価値自体が社会的に低下しているということは、教員自身にとってますます民族教育に対する概念化をさせにくくしていることと思われる。この状況下で漢語を教授言語の一つとして導入するのであれば、それは朝鮮語から漢語への移行を目的とする二言語教育になってしまい可能性があるだろう。そのように考えると、先行研究で問題とされてきた教員の資質については、多民族社会における学校教育のあり方や教育実践の方法についての視座を提供できうる理論的知識の獲得の観点から捉えられる必要もある。教員養成や研修などで、多文化教育や異文化間教育などの理論的知識や実践方法を修得させることによって、中国社会で漢族をはじめとする多民族と共生しながらも、自民族の文化を尊重できる人間を育成できるような教育理念や知識を修得させることが肝要となろう。それが少数民族学校教員としての専門性の育成となり、教員が真に自立的に民族学校での教育実践を行っていく源泉となるのである。

筆者は近年大きな問題となっている民族教育の「危機」について、単に朝鮮族の民族性が消失してしまうのを防止せねばならないとは考えていない。本来個人が身につけている文化は可変的なものであり、社会状況の変化によって維持されることが期待される文化の概念も異なってくるだろうと考えられる。その意味で、韓国（人）との関係から朝鮮族の民族教育の展開について研究していく必要があると考えている。そこで、今後の課題として1992年の中韓国交樹立以来、主に経済分野で深まっている韓国（人）との交流の増加が朝鮮族の民族性をどのように変容させる可能性があるのか、また中国社会における朝鮮語や朝鮮文化の社会的地位に対していかに影響を及ぼすかにつ

いて明らかにしていきたい。

(付記) 小論は、平成13年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚深の謝意を表したい。

- (1) 朝鮮族学校の「危機」に関しては、鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』現代中国研究叢書XXVII(平成11年度)、アジア政経学会、2000年に詳しい。朝鮮族学校が直面する問題については、姜英徳「延辺朝鮮族教育問題に対する探求」、東北朝鮮民族教育科学研究所『朝鮮民族教育科学』2001年第2号、延辺教育出版社、2001年、pp.3-5、朴クメ「21世紀の中国朝鮮族教育発展進路についての思考」、金強一主筆『中国朝鮮族社会の文化優勢と発展戦略』延辺人民出版社、2001年、pp.284-320をはじめ、多数発表されている。
- (2) 延辺のような朝鮮語が普及している地域と、長春や沈陽といった大都市に居住する朝鮮族は単純に比較できないだろう。延辺以外の地域の研究は今後の課題である。
- (3) 中国の教育法令の研究については、篠原清昭『中華人民共和国教育法に関する研究——現代中国の教育改革と法』、九州大学出版会、2001年が詳しい。なお、教員(特に初等学校教員)の社会的地位の低さの問題は、実は戦後日本でも教育学において問題とされてきたことであり(例えば宮原誠一『教師論』要書房、1950年)、その点に限って言えば中国のみの特殊事項ではない。
- (4) ソヒヨソン「市場経済下で民族教育改革の急先務は教員資質向上」、前掲『朝鮮民族教育科学』2001年第1号、2001年、pp.10-11参照。
- (5) 姜永徳「民族教育問題と民族教育発展思想——延辺朝鮮族教育を中心に」、全泰均主筆『〈青年生活〉創刊20周年記念公募作特集 中国朝鮮族社会と青少年問題研究』延辺人民出版社、2001年、p.55-80
- (6) 韓玉淑『韓国と中国延辺朝鮮族の幼稚園教師の教育観比較』淑明女子大学校教育大学院幼児教育専攻修士学位請求論文、1999年(未刊行)
- (7) 朴クメ、前掲論文、2000年、pp.300-301、周チエホン「吉林省朝鮮族教育の基本状況及び発展戦略についての思考」、前掲『朝鮮民族教育科学』2001年第2号、2001年、pp.4-8、「延辺州朝鮮族中小学師資隊伍現状調査報告」(未刊行)、pp.3-11など参照。本資料は自治州教育委員会が調査研究チームを組織して統計数字やアンケートなどを用いて調査した教員状況の報告書である。報告書の出所や内容から2000年時点の状況を報告しているものと見なすことができる。
- (8) 朝鮮族学校の生徒数の大幅な減少問題については、姜永徳「延辺朝鮮族教育問題についての探求」、前掲『朝鮮民族教育科学』2000年第2号、東北朝鮮民族教育

科学研究所、2000年、pp.3-6で詳しく論じられている(本雑誌の出版社名は、2000年発行分は左記のようになっている)。

- (9) 中国では小学校の修業年限が6年制以外に5年制が存在し、初級中学においても3年制と4年制が並存している。
- (10) 朝鮮族初級中学に関しては、生徒数において95年値を下回ることなく98年より生徒数微増しているが、数年後に小学校の影響が表れるることは想像に難くない。
- (11) 姜永徳、前掲論文、2001年、p.62。ところで、1989年の調査資料によれば、瀋陽・長春・ハルビンの3大都市の朝鮮族生徒のうち、70-75%が漢族学校に通っていたというから、散住地区、その中でも都市部では文革後の早い年代から漢族学校に通うのが一般化していたようである。(黄有福『中国朝鮮族社会と文化の再探求』遼寧民族出版社、2002年、p.145参照。)
- (12) 最近のものでは例えば、朴庚來「中国延辺朝鮮族の母国語使用実態」、韓国社会言語学会『社会言語学』10巻1号、韓国文化社、2002年、pp.142-143参照。
- (13) 林采完・金慶学「中国延辺朝鮮族の民族アイデンティティ調査研究」、大韓政治学会『大韓政治学会報』第10集1号、2002年、p.271参照。
- (14) 教師法の邦文については、篠原、前掲書、2001年に掲載の資料を参照した。
- (15) 金チャンドク「散在地区朝鮮族小中学校教員集団の現況についての思考」、前掲『朝鮮民族教育科学』2001年第2号、2001年、pp.9-10参照。本論文は散在地域の状況を述べたものであるが、朝鮮族教員の問題として延辺でも共通するものと思われる。
- (16) 同上論文、pp.9-10参照。
- (17) 同上論文、p.9
- (18) 前掲『延辺州朝鮮族中小師資隊伍現状調査報告』、p.12参照。
- (19) 2002年3月27日現在。
- (20) 初級中学教員からの聞き取りによる(2002年4月2日)。
- (21) 李ジョンモク「中国朝鮮族の教育現況と問題」『全南大 現代社会科学研究』10、1999年、pp.16-17
- (22) 朴クメ、前掲論文、2000年、p.301参照。
- (23) 前掲『延辺州朝鮮族中小師資隊伍現状調査報告』、pp.3-4
- (24) 同上。
- (25) 吳クムスク「中国朝鮮族教育事業が直面した危機とその対策方途」、全泰均主筆、前掲書、2001年、pp.19-20参照。
- (26) 前掲『延辺州朝鮮族中小師資隊伍現状調査報告』、p.9参照。但し、筆者による調査ではこれほどまでに顕著に離職傾向は見られなかった。この種の質問は非常にデリケートであるということに加え、筆者による質問文では「一生続ける」という旨の表現はなく、単にこれか

らも続ける意思があるかというたずね方をしている点も、その要因だと思われる。

(27) 中国では地域により若干学制は異なるが、延辺の朝鮮族学校ではほぼ6・3・3を採用しており、はじめの9年間が義務教育とされている。そして、日本の中学校は初級中学と呼び、高等学校を高級中学と呼んでいる。

(28) 中国では一つの学校の中に初級中学と高級中学が存在する「完全中学」があり、今回の調査では完全中学をも対象としているため、教員属性として両中学を分類しなかった。初級中学クラスと高級中学クラスを兼務している教員もいるため、分類が困難であるからである。また、本調査では師範学院の教員も調査対象としたが、本論文では師範学院教員は研究対象に入らないため、調査対象から除外している。

(29) 本調査で分類した、「都市」と「地方」の概念について、中国の公的機関から発行されている統計では地域を「城市」・「県鎮」・「農村」の3つに分類しているが、本論文では「城市」を「都市」、「県鎮」「農村」をあわせて「地方」に分類した。その理由は、延辺において単独朝鮮族学校が2000年現在すでに1校しか存在しておらず、比較対象として3地域を設定するのが困難であったということが一因である。また、それぞれの設問において無回答や回答違反は集計から除外した。

(30) 門脇厚司・藤田晃之「日韓中三国の教員・父母・生徒の教育意識の比較検討——『韓・中・日教育意識比較調査研究』をもとに」、『筑波大学教育学系論集』第24

卷第2号、2000年、pp.1~31参照。

- (31) 久富善之編『教員文化の社会学的研究』多賀出版、1988年参照。
- (32) 韓玉淑、前掲論文、1999年参照。
- (33) 岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社、1999年、pp.172~182参照。
- (34) 本論文では民族性の度合いについて、朝鮮語力や朝鮮族集団への帰属意識の強さ、そして民族の衣食住文化、民族言語への志向度を示すものとしたい。
- (35) 出羽孝行「中国の朝鮮族の生徒の言語と民族文化の維持」、異文化間教育学会『異文化間教育』15号、アカデミア出版会、2001年、pp.198~208参照。
- (36) 延辺教育出版社の関係者への聞き取り調査の内容による(2000年9月)。
- (37) ただ、実際には延辺において漢族学校への転校を希望する者は2000名以上にものぼっているが、教育行政部門の転校統制により転校が抑えられているという現状があり(李ヨンシク、前掲論文、2001年、p.6参照)、そのため漢族学校への転校を希望するものは小学校に入学するときから漢族学校へ行く傾向が存在しているといふ。(朝鮮族中学校長の話より。2002年3月26日)
- (38) 姜永徳、前掲論文、2002年、pp.4~6参照。
- (39) 「延吉市八中『二種類の言語』教授改革で新しい突破を」、『延辺日報』2003年3月6日、第3面参照。
- (40) 宮原、前掲書、1950年、p.77

付録

【朝鮮族学校の先生の教育観に関する調査(2001年調査)】(本文で分析した設問)

- 教員の職業に対する現状についてどのように考えますか。下の項目それぞれについて答えてください。(それぞれを○で囲んでください。)
(A)使命感 (B)道徳品性 (C)生徒に対する愛情 (D)教職の専門性 (E)積極性 (F)教員自身の民族的自覚 (G)保護者からの評価
(H)生徒からの評価 (I)社会的地位 (J)経済的地位(給与待遇) (K)職業の安定性 (L)教員の民族性維持度 (M)他の職業との相対的評価
1,非常に高い 2,多少高い 3,普通だ 4,多少低い 5,非常に低い
- 教員の給与待遇を改善せられれば、多くの「優秀な」教員が確保できると主張する人もいますが、これについてどう思いますか。
1,全くそう思う 2,多少そう思う 3,どちらともいえない 4,あまりそう思わない 5,全くそう思わない
- 漢族学校への転校を希望する生徒・保護者にはどのように対処していますか。
1,続けて朝鮮族学校に通うよう説得する 2,生徒や保護者の意見を尊重する
- 民族教育の概念について最もあてはまるものを1つ答えてください。
1,民族言語で授業をすること 2,自己の民族についての知識を教えてあげること 3,自己の民族性に目覚めさせること 4,その他()
- 現在の朝鮮族社会において、朝鮮民族の特性(言語、風習、生活習慣、価値観)は全体としてどうなっていると思いますか。
1,非常に弱まっている 2,多少弱まっている 3,どちらともいえない 4,多少強まっている 5,非常に強まっている
- 生徒に対する、学校での民族教育で最も重視する事柄を1つ答えてください。
1,朝鮮語力の向上 2,朝鮮族としての意識を持たせること 3,朝鮮民族の風俗(音楽や踊りや文学など)を体験させること 4,特になし 5,その他()
- これから民族学校のあり方について、下の項目についてそれぞれどのように思いますか。
(A)教授言語を変更 (B)授業改革 (C)漢族教員の増員 (D)寄宿制度の導入
1,是非行う必要がある 2,多少行う必要がある 3,どちらともいえない 4,あまり行う必要はない 5,全く行う必要はない
- 教員の職業について満足している点を3つまで答えてください。
1,社会的地位が高い点 2,職業的に安定している点 3,将来性がある点 4,給与待遇がよい点 5,生徒と接せられる点
6,教職は聖職である点 7,やりがいがある点 8,国家の発展に貢献できる点 9,朝鮮民族の発展に貢献できる点
- 今後も教職を続けていこうと思いますか。
1,全くそう思う 2,多少そう思う 3,どちらともいえない 4,あまりそう思わない 5,全くそう思わない

【朝鮮族小中学校の先生に関する質問紙(2000年調査)】(本文で分析した設問)

- 定年退職まで教師を続けようと思いますか?その理由も教えてください。
1,全くそのように思う 2,そのように思う 3,あまりそのように思わない 4,全くそのように思わない
- 民族教育をする時、最も難しい点は何ですか?